



1979年(昭和54年)

10月号(No. 412)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

オーストリア・アルペン・クラブ	
百年祭 (福田宏年) …(1)	
ヘルリッヒコフファー氏よりの報告書 …(2)	
第7回山岳史懇談会	
“女性の登山を語る” …(2)	
日高元会長の遺稿を読んで (大木 操) …(5)	
図書紹介 …(6)	
東西南北 …(6)	
『山日記』のすすめ(松丸秀夫) …(8)	
二つの委員会からのお願い …(8)	
お知らせ (学生部) …(9)	
報告 指導委員会・関西支部 …(9)	
会務報告・ルーム日誌・会員移動 …(9)	
図書受入報告 図書委員会 …(11)	
カット/松本慎太郎	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開設時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

オーストリア

アルペン・クラブ百年祭

福田 宏年

去年の十一月、私が止宿していたウィーンのアパートに、友人の近藤信行氏から手紙が届いた。オーストリア・アルペン・クラブから百年祭の催しに出席するよう日本山岳会に招待状が来たが、たまたま君がウィーンに滞在中なので、日本山岳会代表として出席するように、とのことである。間もなく、十一月の末に、オーストリア・アルペン・クラブからの正式招待状が私の許に届いた。

十二月六日、午後五時から、オーストリア第一貯蓄銀行の広間で、「オーストリア・アルペン・クラブ百年展」のオープニング、同日午後八時からウィーン大学大講堂で記念講演会、翌七日は正午にウィーン市長による招待午餐会、夜はアウアースベルク宮殿で祝宴が張

られるという事になっていった。ところが折悪しく私は、十一月二十五日にアパートのエレベーターのドアで右手をはさまれて、中指の先を一センチほど落すという事故を起していた。グルグル巻きの右手では食事もかなわないので、七日の午餐会と祝宴は失礼して、六日の二つの催しに出席することにした。

オーストリアには現在何百という登山クラブがあるが、オーストリア・アルペン・クラブは中でも一番古く、一番大きい。しかし、群小のクラブを統べる上部組織ではない。あくまで数多くの登山クラブの中のひとつである。しかし、著名な登山家のほとんどはこのクラブに属しているとのことである。これは知人の「アルパイタ

ー・ツァイトウング」の運動記者に聞いたことである。

私は去年の四月にウィーンに着いたが、間もなく新聞の紙面は連日、オーストリア・エヴェレスト遠征隊の酸素マスク無しの登山の記事で賑わった。私はその時はじめて、去年がオーストリア・アルペン・クラブ設立百年目に当ることを知った。メスナーが無事登山を果した時、ウィーンはその話で持ちきりだったが、ドイツ人のヘルリッヒコフファーが登山に疑義をさしはさむ発言をした時には、多くの人が怒り、私も友人たちから何度か感想を求められた。

十二月六日はマイナス十度を越す寒い日だった。夕方、私は包帯でくるんだ右手を抱えて、市の中心のグラーベンにある銀行に出かけた。銀行の一階広間には、数々の八千メートル級の登山の写真や手紙をはじめ、古い山岳書などが展示してある。会長のカール・リ

ント博士の挨拶があり、それが終ると私はイギリスやイタリアの代表と一緒に真中に呼び出された。仕方なく短い挨拶をした。会長さんから、記念出版の「オーストリア登山百年史」を手渡された。私はこういう華やかな席が苦手なので、なるべく隅っこに居ようとする。日本からの出席者が珍しいのか、人が寄って来ては真中に連れ出そうとする。私の手の包帯を見て、山で凍傷にかかったのかと訊く人もいる。明日は大統領も来るから是非午餐会に出席してくれと、多くの人が改めてすすめる。会場には著名な登山家が沢山来ているはずであったが、私はヘルバート・ティッヒ博士の顔をちらと見ただけであった。

切手を売っている。私は何枚か求めて封筒に貼り、発行第一日のスタンピングを押して貰った。このスタンピングはこの会場だけでしか押されなかったはずだから、その数は少ないと思う。この切手は、手渡された本と一緒に、山岳会のルームに届けておいた。

ウィーン大学の講演会場には、私のためにいい席をちゃんと確保してくれていた。講師はハンス・シュル、演題は「ヒドン・ピーク、ナンガ・パルバット、エヴェレスト——八千メートル級の山と影」である。シュル氏は、一九七五年にはヒドン・ピーク遠征隊に加わり、一九七六年のナンガ・パルバット遠征隊では隊長をつとめて南西稜から登頂し、さらに去年行われたエヴェレスト遠征にも加わった人で、現在のオーストリアの第一級のアルピニストの一人である。

会長の紹介で壇上に立ったシュル氏を見て私は驚いた。細身の優男で、とても百戦錬磨の登山家には見えない。しかも演壇の右端の壁側に身をすり寄せるようにして、消え入りたいような風情で立っている。元来控え目ではにかみ屋の人なのだろう。やがて明かりが消えると、スクリーンにスラ

山をきれいに「三」は持ち帰ろう

イドが大きく映され、シエル氏はテキパキした口調で説明を始めた。この説明が実に簡潔で的確で、とりわけルートの説明は正確この上もなく、私のような素人にも非常によく理解できた。

講演が終ると、私はまた改めて何人かの人から翌日の午餐会へ誘われた。午餐会に出席できなかったのは残念であり、とりわけ日本山岳会の方々に申し訳ない気もするが、他方、大統領と昼飯を食べることを免れて、ほっとした思いもある。

第七回山岳史懇談会

女性の登山を語る

佐藤テルさん山下滋子さんに聞く

図書委員会の年中行事の一つ山岳史懇談会は、今年で七回を重ね、新ルーム移転一年目の二月十五日、ルーム集會室において開催されました。

最初に司会の山崎さんより女性登山の歴史について次のような解説があり、続いて佐藤さん、山下さんのお話になりました。

近年世界を通じて女性登山の活躍がめざましく、日本に於ても仏教の普及で女人禁制となつてしまつた山々が、明治維新によつて解放され、それ以来日本各地の登攀記録が記されるようになりまし

女性として初めて北穂高岳、また昭和九年冬剣岳に登つておられ、当時のお話が伺えないのは残念でした。

女性の登山には古い歴史がありますが、江戸時代には女性の山登りは行なわれていません。明治になつてポツポツ登られるようになりまし

た。大正に入るとウエストン夫人の大正二年穂高南壁や北鎌尾根、東京や大阪の女学生の登山活動が盛んになって来まし

ヘルリッヒコッファア氏よりの報告書

昨年ポストモンシーズン期にエベレストへ登つたドイツ・フランス合同隊隊長K・M・ヘルリッヒコッファア博士(ミュンヘン大学名誉教授)より、その時の報告書が編集宛に参りましたので、掲載します。この合同隊はシエルバ三十人、ポー

ター六百余人、荷物は十トンを運んだと言われています。

構成 Dr・K・M・ヘルリッヒコッファア、ドイツ・フランス合同隊長、ドイツ隊長、ドイツ副隊長、フンダ・ズイギ・フブファウアー、副隊長、ワンダ・ルトキエヴィツチ、副隊長(ポーランド女性)隊員IIヘルムート・ダウム、ヨルク・F・ダウム、ハンス・エンゲル、ギンター・ヘルター、フーベルト・ヒルマイアー、ハンス・キルヒベルガー、ヴィルヘルム・クリメク、ベルント・クルマン、ヨゼフ・マック、ゲオルク・リッター、マリアンヌ・ヨゼフ・ヴァルター夫妻、ロベルト・アレックス・ハインス、助手としてマルチン・リンク、フランツ・ザイラー、フーベルト・ヴェールス、他に医師のDr・ホルスト・ラウベ、カメラマンのホルスト・シューマン、ベースキャンプマネージャーのドリス・クスターマン

この遠征隊は財政上の困難のため、最初から隊員それぞれに、特別の負担を要求することになった。頂上をねらう資格をつくるには夫々が、BCからC2へ、少なくとも25Kgをかつぎ上げなければならなかつた。つまり女性も含め、だれもがルックサックをかつぎ、アイスフォール

でも確かにづらい仕事だったが、このことにより必要資材の総てが、急速に高所キャンプに運び上げられ、高度馴化は非常にうまくいった。シエルバ達は隊員が荷を運んだことに深く感銘し、この熱意に鼓舞された。

高所キャンプが設営されている間、天候の状態は変り易いものだったが、10月初めに頂上を攻撃する高所キャンプ設営のため、9月という期間には完全に利用することができた。冬の前ぶれである最悪の天候になったのは、10月4日と5日だった。我々が出会つた新雪の量は膨大なもので、テントを掘り出すのにしばらく時間がかつた。補修を終え、高所キャンプを結ぶルートが再び開通した。あくる日は広範囲にわたる高所嵐のため、それ以上サウス・コルへ進むことを阻まれた。しかし一方、斜面や尾根の雪が吹き飛ばされ、ウェスタン・クウムにまともて押しつけられたため、嵐がやむと条件は理想的なものに変わった。

10月12日から天気は良くなったが、風はまだ治まらなかつた。私はゼップ・マックとハンス・エンゲルの二人に、次の日C2からサウス・コルへ登るよう命じた。天気の概況も好転し、天気予報でも、冬が始まるまで風力40ノットの風をとまらぬ、四日間の好天が期待できそうだとのこと、私はこれに期待をかけた。そして遠征隊の屈強の者二人なら、登頂成功のため何らかの取っかかりが得られたように思えた。10月13日午後、この一隊は間隔を広くとりながらサウス・コルへ進んだ。我々の仲間のチーム二人は、マゾーと彼の仲間ディームベルガーとヒルマイアーの二人に合流した。天候はよかつたが、強い風が吹いていた。朝になって風速が落ち、8時ごろ風はほとんどなくなった。最初に起きた二人はエンゲルと

ります。昭和九年一月の浅間山はYWC Aの三田さん姉妹、YWC Aでは谷川岳一の倉に昭和十一年夏女性クライマーの笹淵みな子さんが登攀されています。このような歴史を経て現在では女性だけのパーティでヒマラヤなど数多くの遠征隊が出ておりましたが、特に今回は昭和初期頃のマボロシのお話、苦心談、エピソードなどを交えた裏話をお伺いすることに致しました。前置きが長くなりましたが、先に佐藤テルさんのお話です。

冬の富士へ登る

昔は物価が安く、山に人がいなくてそれだけに楽しくまた苦勞も多かった。あまりにも時代が変わったので、自分達が昔盛んにやっていた、冬山の苦勞は今の若い人にはわかってもらえないと思います。デューボンがナイロンを發明したことが我々の登山技術や登山裝備に革命的な大変化をもたらしました。余談になりますが私共がこんなに簡単に冬山に行けるようになったのはナイロンが發明されたからではないかと思えます。ナイロンが何故發明されたかは皆さん既にご存知でしょうが、昭和の初め満州事変、支那事変が始まって日本が絹が外国、特にアメリカに輸出されなくなり、パラシュートの布地に困るようになり、作りました。そこでデューボンが考えて作り出した

のがナイロンだったのです。第二次世界大戦が終って三年後まで、民間でのナイロン使用は禁止されていたと云うことです。ナイロンの出現によって、防水・防風と、テントは勿論スリーピングバック衣類など非常に軽量で便利になりました。話は横道にそれましたが……

今日はこんなお話ではなく、自分の楽しみで登った十一月過の、隅から隅まで歩いた若い頃の北アルプスのお話をいたします。その頃山登りを終え麓に下りて来ますと、必ずと云っていい程、有明や松本の駅前に新聞記者が待っていて、原稿を書いてくれと言われました。その当時は積雪期の北アルプスに女性が入っていなかったからです。初めの中はお断わりしていましたが、毎回の事でお断わりするのも面倒くさくなって、つい書く事を承知する有様でした。戦後マッカーサーが日本に来ました時に、GHQに有名なクライマーがいまして、山の映画会を開いたことがあります。

私が冬山になぜこんなに夢中になったかと思えますと、大正十四年夏、当時富士山の有名なガイドに梶房吉と云う人がいまして、その梶が他のグループについて富士山に登っている時のことでした(その当時はまだガイドではなく強力と云っていた)。私がおさげ髪でセーラー服を着ていた時代で

マックで、エングルは酸素なしで頂上に登りたいと希望を出した。このことはゼップ・マック一人で、ルートをつけねばならないということだった。マックはこのため三つの酸素ボンベを持って出発した。

1時間後マゾー、ディームベルガーと共に出発したヒルマイアーは、途中で二人と別れ、二人はC4へひきかえした。約7時間後、ヒルマイアーは先頭をいくゼップ・マックにヒラリスステップで追いついた。マックが設置した40Mザイルのおかげで、ヒルマイアーは高さ20Mの絶壁を登ることができた。このザイルを設置したため、残る15名全員がこの恩恵に浴した。

午後4時15分、最初にゼップ・マックが地上最高点に達した。30分してヒルマイアーが頂上に着き、午後5時には幸運なエベレスト征服者ハンス・エンゲルが、ついに尾根の先端に立った。

翌日——10月15日——頂上はフランス隊で大にぎわいだった。ピエール・マゾー(49歳)、オーストリアのカメラマン、ディームベルガー(46歳)、二人のフランス人Dr・ニコラ・ジャジェールとジャン・アフナジェフは、朝4時には出発した。午後1時15分すぎ、若いフランス人二人がまず頂上に着き、1時間30分後頂上に着いた幸運な者は、マゾーとディームベルガーだった(ディームベルガーは四つ目の八千M峰だった)。

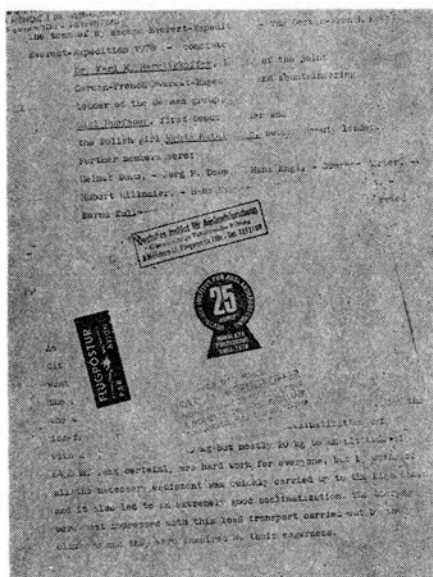
10月16日には、さらに六人の男性と女性一人がエベレスト山頂をめざして登り、凡そ8時間後に目的を遂げた。彼らはズイギ・フブファウ

アー、スイス人登山家ロベルト・アレックス・ヴィーリー・クリメク、ポーランド女性ワグダ・ルトキエヴィッチである。ルトキエヴィッチは女性として三人目、ヨーロッパの女性登山家として初めてエベレスト山頂を踏んだことになる。

このグループと一緒に、シエルパのミンマとアン・ドルジェ二人とも酸素を使わなかった。それにアン・カミが頂上に達した。

10月17日は晴れていたが風が激しく、二人のドイツ人がこの年最後のエベレスト登頂をすませた。彼らの一人ベルント・クルマンは初めソロで登ることを希望していた。ゲオルク・リッターは16番目だったが、BCから頂上まで三日間で登っている。

BCを撤収し帰路についた我々は、仲間うちから一人の重病者も出さなかった幸運を喜びあった。とくに山に残さねばならない友が一人もいなかった幸運を皆で喜びあった。



す。学校の修養会の帰り私共四・五人のグループで富士山に登ろうかと云うことになり、根上と云う人と一緒に歩きました。その根上と梶が大変仲が良く、歩いている中に梶が寄って来て「貴女なら冬の富士山に登れそうだから一緒に登りましょう」と一生懸命すすめてくれました。その頃はまだ小さな山しか歩いていませんし、冬の富士がどの位すごくてえらいのか全然知りませんので返事が出来ませんでした。自分が絶対に責任を持つから是非行きましようかと梶は云うのです。

大正天皇が亡くなられ、世の中がはなばなしい事やっていたとはいかないような風潮になっていた時に、女性が雪中富士登山をするに云うような事は世間様に対し申しわけないから、こっそり行ったらいいだろうと、母も云ってくれましたので、行く事に決まりました。その時の恰好は勿論ナイロンなどありませんし、手編の毛糸の帽子とショールをつけ、登山靴はまだありませんでしたので藁靴をはき、薄い靴下と毛の靴下の間にたくさん唐辛子を入れ、その上に長い毛の靴下をはいていました。靴の上には今で云うアイゼンですが、その当時は二五〇匁の三本足の爪の長い金カンジキを結えつけました。女が山に登ると山がけがれると云う事になってしまし、梶と根上に連れられて麓の浅

間神社に行きお祓いを受け、清めてもらってから登りました。

当時はどこも小屋が開いておりませんし、雪や風で飛ばされないのでに全部石で囲ってありますので、中に入るのがむずかしく、三合目の小屋は屋根をはがすのに一番いいから、と云うことで三合目の小屋に泊りました。寝袋もなく、マイナス三〇度の寒さでチョロチョロと火をもすだけです。夜中二時頃起き細引きをザイルの代りにして一直線に登りました。八合目あたりでご来光を見て、頂上には午後二時頃に着きましたが、小さな浅間神社の祠があるだけですから、そこで休んで下山しました。雪の状態が悪く、凍

の富士登山の面白味が私の身体にまといついて、それ以降どうしても雪山から離れる事が出来なくなり、その翌年からずっと雪山をやることになりました。

積雪期北アルプスに挑む

冬山をやりますにはどうしてもスキーを知らないと不便です。当時黒田初子さん、村井米子さん達が鹿沢辺りから滑っていらして、私も藤島さん達から誘われておりましたが、母がスキーと云うものを全く知りませんので中々お許しが出来ません。富士登山から数年して、ようやく母が目で見えて確かめた上と云うことで、佐藤信彦と云う人に連れられて赤倉まで行きなした。という娘がしてもし支えな

い、というところで四年振りに許可がもらえました。母はその後、私以上にスキーに対して興味をもつようになりまして。このようにしてスキーを山に登る手段としていくようになっていきました。

昭和五年、女子の山岳会と云うものを初めてYWCAに作り出した。独身の良家の子女が山登りに出掛けると云うのは大変なことで、そんなおてんばなことをしてはお嫁に行けないと親戚の者が皆反対しましたが、私はどうしても山が好きで、それにYWCAの方達も山に行きたいと云う気持を持つ方が多くいました。山岳会を作ればどんな方でも遠慮なしに堂々

とズボンをはき、列車に乗れ山に行けると考え、五・六人の同志で作ったわけです。多分これが女性の山岳会としては日本で最初だろうと思います。創立の時からお手伝い下さった三田好子さん正子さん姉妹が浅間山で遭難し、これが日本における女子の山岳遭難の第一号で、ジャーナリズムに大変さわがれました。女がスキーなどはい山など行くから遭難がおこるのだと云う非難もありました。けれども私は、父が鉱山業で山を歩くのが商売でした関係で、父と一緒に歩いたりしていました。ですから母も理解してありました。しかし一般の家庭では中々理解されず、山に出掛けたと云うのは色々不便がありました。

また、私は大町の桜井とか、有明の小林とか、昭和七年頃からは太田と云うような大変いいガイドがついていまして、男性の方でも積雪期に歩かれていないと思われ北アルプスを歩くことが出来ました。

一番ひどい目に合って今でも忘れられないのは、十一月に白馬から針の木まで出て約一週間、針の木から祖母谷に下りて三俣蓮華、さらに西鎌尾根を通って槍ヶ岳、槍沢をスキーで滑って一の俣小屋を出る、と云う二週間のプランを立てて出掛けた時の事です。この時私達は運が悪いと云いますか、運がよいと申しますか、お天気は良

かったのですが非常に雪がひどくて苦労いたしました。その当時は小屋がどこも開いていませんので、一週間分の食糧と寝具その他炊事道具等を全部背負い、スキーをかついで白馬から出発しました。針の木の小屋には大町の対山館にお願いして、大沢小屋から針の木小屋へ後半一週間分の食糧を上げていただくようになっておりました。食糧は最後まで必ず二日分位は残しておく習慣がついていました。食糧が全然届いていない。食糧は何とか食べつなぐ事が出来ると思いましたが、困ったのは紙のないことです。小屋の隅々まで探しても何一つ見つかりません。針の木から下を見ますと大沢迄は来たような足跡がありますが、そこから上はあまりにも雪がひどく上っていかないのです。今更大沢小屋に下りられませんし、先に進もうと云う事になり、命がけのような苦勞をして三俣蓮華に行きました。どんな道を行ったのか、雪

がひどくて地図上ではたどれませんが、ようやく窓をこわして三俣の小屋に入りました。食物も燃料も何一つありませんでしたし、私共の食糧もあとわずかしが残っていませんので、動かずに一日一食お醤油ご飯ですませることにしました。でも頼みのお醤油も寒さのために瓶がわれ、なくなってしまう。翌日から二日間吹雪か

れ、小屋は全部埋ってしまいましたが、水のようなお粥を食べて寝ていると、不思議なもので、夢はご馳走を食べるものばかり、私の事です。それから大きな家に女中奉公に入って、お台所のすみでつまみ食いをする。と云うような夢です。三日月に風が弱まり温度が下りました。これならば多分お天気になるだろうと、朝お日様が出てから雪崩の危険をさける為、二時頃出発いたしました。おそろおそろの鎌根を通り、大変な苦労でした。槍沢をスキーで滑ろうと云うので、ずっと十日間もスキーをかついで来たのですが、そのスキーが帆かけ舟の帆のようになって風にふられ、身体のパランスがくずれてしまふのです。やとたり着いた槍の殺生小屋は雪の為に入れませんでした。それでも兎に角槍沢で滑ろうと出発したのですが、大きなデブリの出た後で全然スキーは使えず、下の方は前年の台風で倒木が多く、デブリと倒木のミックスでスキーどころではありませんでした。槍の小屋から一の俣の小屋迄大変な苦労の連続で、真暗になってやとたり着きました。さすがの太田もべたんと坐って動けない程でした。翌日の夜まで丸一昼夜、ご飯も食べずにぐっすり寝こんでしまいました。この山行は非常に苦労しただけに大変楽しい旅だったと思っています。

生死を共にし、雨や雪でボロボロになっている地図、ご自分の歩かれた尾根や谷、沢など朱線がたぐさ書き込まれている北アルプスの地図を見せたいだきまし

た。このあとYWCAの山岳会の経歴と活躍、旧鹿沢に小屋を持つようになつたいきさつなど時代を背景とした面白いお話がありました。

続いて関西方面の山で活躍なさった山下さんより、当時の興味深い苦心談など、例えば運動具店に登山道具や服装を全部預かっていただいて、山に出掛ける時はそのお店からこっそりと出掛け、家族の者にも知らせなかったとか、職業婦人と云うことだけで、異人種扱いを受けていた時代の女性登山だけに、現在では滑稽とも思えるようなご苦心をされ山に行かれていたお話など伺いました。

時間のたつのも忘れてなごやかに歓談が続き、まだまだ書ききれない程のお話がありましたが、紙面の都合上残念ですがこれで終わります。

(織田沢美知子)

出席者 野口末延、島田巽、折井健一、織内信彦、村井米子、中村小一郎、菅野弘章、小原晴子、山崎安治、金坂一郎、広瀬健三、門井照子、近藤信行、黒石恒、越田和男、松家晋、飯田進、武田満子、滝川清、織田沢美知子

(順不同)

日高元会長の遺稿を読んで

——忘却の世界から蘇り感無量——

大木 操

日高信六郎元会長の珍らしい未発表の遺稿がしかも多量にあることを、今年の晩春本会会員の斎藤健治さんから突然知らされて私は大変驚いた。間もなく送ってきた全原稿(コピー二百字詰原稿用紙百枚)の内容を見ると、日高君の同郷同学の先輩であり岳友であり、同じ外交官生活の途を歩んだ守島伍郎君の死(昭和四十五年六月四日)を悼み、その全生涯に亘って限りない追憶の情を自ら克明に綴った貴重なものであることを知って私は再度非常に驚いた。と同時に遺稿中に私自身のことについても二三触れているので、益々感慨を新たにし敢て筆を執った次第である。

因みに故守島君は私と同級の山仲間であり、大学生時代に「山岳」第十年第三号に「塩見岳」、同第十一年第三号に「千槌木山」の登山記を寄稿しており、日本山岳会とは浅からぬ関係にあった。日高君遺稿と共に守島君の山のスケッチや遺稿を送られた、斎藤会員の御厚情に對し改めてここに深く御礼を申し上げる。

日高君は遺稿の冒頭で守島君との付合いは一生続いたが、そのキッカケは山登りであったと述懐している。同君が大正元年九月に一

高入学直後、恒例の秋の軍事演習が宇都宮近郊で行われた時、余暇を利用して日光の男体山に登ったがその発起人は守島、大木両先輩であり、これが自分の山らしい山へ登った最初であると記述している。

これについて思い出すことは、先年私が会報「山」第三七五号に寄稿した岳友日高君を偲ぶの記事に添えた赤城山頂の写真である。実は日高君のこの遺稿によってこの写真は男体山頂の間違ひであったことが判明したので、ここに私の記憶違いを謝して訂正させて頂く。なお山頂の写真に写っていないが、当時まだ大学生だった後の末弘殿太郎帝大教授や、私の同級生秦豊吉君(後に帝劇社長、若きウエルテルの悲しみの訳者)倉田百三君(出家とその弟子の著者)などが、この男体登山と一緒にしていることを新たに発見して往時を回想して感慨が尽きない。

日高君は一時時代に四谷左門町の大家宅を守島君と二人で訪ねてきて、一日中山の話ばかり語りつづけた揚句、寿しを振舞ってもらってとても楽しかったと述べている。私はすっかり忘れ去っていたことだが、この一話を讀まされて俄然昔懐かしさで胸が一杯になつた。またその頃日高君は矢張り守島君と共に、一高の梅沢親光先輩や日本山岳会の木暮理太郎、田部重治両先輩の所へ押しかけ、登山話をせびって夜更ししたことが度々だったと回想している。私も二度同行した記憶を蘇らせこれまた懐かしい限りである。

山には関係ないがユーモラスなエピソードを一つご紹介しよう。大正元年の秋一高陸上運動部が主催して駒場農学部から二子玉川までのマラソン競走を行った。この時の模様を日高君は次のように述べている。「守島さん達と応援券見に行ったところ、応募者不足で主催者側の木暮さんは大弱り、君たちも走ってくれよ、メダルはビリまで出すから」とのご託宣に釣られて、吾々野次馬はズボンの裾をまくり上げ足袋跳足になって走り出した。結果は私がビリ、守島さんはビリから三番目だった。スッカリへばったがそれでも弁当にありついた後、粕谷村まで麦畑の間を歩いて徳富芦花さんに面会を申し込んだが、入口の枝折戸で夫人から二歩もなく断わられ、難言を吐いて引上げた思いが残っている」と。こんなことがあったのかと今更ながら夢見る心地がするが、それにしても若さをむき出しにした野性味溢れるご両人の面目躍如たる様子が偲ばれて興味津々である。

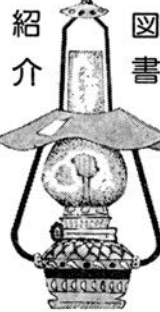
日高君は大正三年七月下旬一高

旅行部登山隊のリーダーとして白馬岳へ登ったが、その登山記を東京朝日新聞に送り十一回連載されている。八月十六日白馬頂上の夜の記事の中に「話にも飽いて小舎に備付の手帳を見る。これは山下の北小谷小学校長平林徳弥氏が昨年寄附されたのだそう中で中々面白い思い付があった。開けてみるとあるある、いろんな人の名文や名句や名歌が羅列している。例のウェストン夫妻の英文のものもある。ば、昨年登って四日も風雨で小舎に閉じ込められた友人O君の徒然のあまりの漫筆もある……」との一節がある。

この友人O君とは正しく私大木であることは間違いないが、茫々七十年近い遠い昔のことであるから何を書きつけたか今の私には全然記憶がない。果てない望みだが古い登山史の一資料になるであろうこの頂上小舎の貴重な手帳が、若しや平林校長一族がどこかに現在残っていないだろうか知りたいものである。

社会人になってからの日高君の回顧の中にこんな一節があった。大正十二年当時ベルリン駐在の守島君が外務本省勤務となり海路帰国した際、兼てじつ懇だった横浜在住の日本山岳会創立者の一人高野鷹蔵氏方を訪れて、携帯してきた荷物全部を一時お預けした。翌日外務省へ出頭した途端に例の関東大地震に出遇い不幸にも横浜の

高野家は全焼したため、守島君は全く着たままの洋服一着の外、ネクタイピン一本という窮乏のどん底に転落した。翌年匆匆帰国した日高君が之を知り、早速着古した縞ズボンを寄贈したら大変喜ばれたと、日高君は往時の先輩の窮状を感慨深げに追憶している。両君の間に結ばれていた太い友情の絆が偲ばれて、ただただ感無量というの外なかった。



登山者のための生態学

渡辺弘之著

山にはさまざまな登り方があるから、好き嫌いはいえてもその良し悪しをいうことはふつうはできない。しかし、どのような登り方をするにしろ、一度山に入れば、私たちは、そこにある樹木や草花や、あるいは鳥や虫や、岩や苔や水と否応なしに対面し、つきあわざるを得ない。そうしたときに、対面の仕方やつき合い方を知っているのと知らずにいるのでは、私たちの山登りの仕方も、あるいは山の側からの私たちへの遇い方も当然異なってくるだろう。この本は、そうしたつきあい方の手は

どきを教えてくれる点でまことにわかりやすく、手頃な手引き書といえる。湖と沼と池とはどう違うかと、密生している森林でもその面積の九九％は空地だとか、アカマツ林は生態系破壊の結果だとか、けもの過保護は森林の荒廃につながるかと、ライチョウの移殖はなぜ失敗するかとか、私たちが何気なく見過していることが自然界の大きな輪廻転生の枠組のなかでどのように「自然に」おこなわれているのか、したがって登山者がどんな登り方にしろその世界に一步踏みこむことによって、生態系のバランスがどのように崩れてゆくのかといったことをさまざまな角度からわかりやすく説明してくる。こうして自然の生態系を知ることにすると、当然いま烈しい話題になっている自然保護問題に行きつかざるを得ないが、咆哮でも偏狭な熱弁でもない、バランス感覚のある意見を読んでいると、現在の生態系の崩壊と山登りの関係を一層深く重く考えさせられる。造本上の弱点のため外見に見劣りするが、大変面白かった手引き書である。

昭和54年2月20日発行 山と溪谷社刊 一三〇〇円(大森久雄)

●雪崩研究会開催日時変更●
12月6日(木) 18時~21時
に変更となりました。



東赤石山と四国回想

名須川 浩

東赤石山に別子山村から登りたいと思った。ここから登れば私は程よい行程のところにいる小山小屋があつてゆっくりできることと、別子山村は日本で人口が最も少ない村であるとわかった。よしそこへ行ってみよう。

四月十一日、伊予三島駅からバスは峠を越えて銅山川を過つて一時間半、別子山村に入り、頼んでおいた和風の宿の夫妻に迎えられた。親切なもてなしを受け、荷揚げ人夫の手配も済ませてくれた。

連日快晴、絶好の天気恵まれた。十二日は寝具、食糧その他を山小屋(赤石山荘)まで運んで貰い、私は昼の弁当だけ持って一日がかりで山小屋まで登った。瀬場谷に沿って登っていく。雑木林を通して、八間滝といふかなり大きな滝を見ながら、やがて銅山川を距てて、平家平から笹ヶ峯の方へ連なる伊土国境の山々が見えてくる。標高一四〇〇米のあたりから笹原になり、行く手に当って見事

な岩山が見えてくる。八巻山の岩尾根が、東赤石山に連なるものらしい。ゴロ石道を辿って近づいて行くと、山小屋はこの岩壁を見あげる位置にあった。小さな平で、南は土佐の山々に向って広く展望が開けて気分がいい。他に宿泊者もなく、裏の湧き水で自炊。

十三日、昨夜は冷え込んで、今朝は雲一つなし。いそいそと出発。見あげる岩壁の下を西に廻り込んで草地を適当に選んで登っていくと、赤石山脈の稜線に登りついた。縦走路が通じていた。シャクナゲやヒメコマツの間を抜けて、岩場にかかる道もはつきりしなくなり、登りやすそうところを選んで行く。一つの岩峰の上に立つと主峰の東赤石が見える。石鎚が見える。筒上や手箱のあたりも見える。さらに岩峰を越えたら鞍部が赤石越えて、林を通り抜けて登ると、東赤石の頂上であつた。こんな晴天に登った事が全く嬉しかった。岩に腰かけたり、歩き廻ったりし乍ら展望を楽しんだ。遠く剣山の方までも見えた。石鎚の雪も見えた。

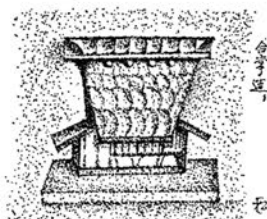
石鎚山に登ったのは大正十一年の夏だった。松山中学三年生が誘い合せて五人。私の兄とその友人の二人の松山高校生(旧制)合計七人の一行であった(私の兄は日本山岳会物故会員で「山岳」第五

十二年に藤島敏男氏による追悼記がある。

第一日は横河原から黒森峠を越えた。まだルックサックはなくて、荷物は風呂敷を縫い合せた袋に詰めて肩に担いで、わらじ履き。峠の茶屋で駄菓子を食べてラムネを飲んで、梅ヶ市に下って木賃宿に泊った。仲間の一人に最近会って話を聞くと随分きたない宿だったというが、私には谷川の淵で泳いだり、蜚舞う窓辺のランプの下に枕を並べて寝た楽しい思い出しか残っていない。翌日はいよいよ石鎚に登った。堂ヶ森の登りが長かった。見える山に登るとその向うに山がある。それに登るとまたその向うに山がある。つくづく山というものは大きなものだと思った。僕は前年に高縄山と障子山に登って、始めてではないつもりでいたが、それらとはちがった大きな山だった。鎖につかまって石鎚の頂上に登りついた。見えるものは山ばかり、山の間から平野が見えたのかどうか思い出せない。僕は山また山の別世界に圧倒されてしまっていた。頂上からは面河に下った。面河からは登山路ができて間もない頃で、

に美味しく、宿もまだ新らしくたように思う。
翌日は八十八ヶ所霊場の岩屋寺に参詣して久方に泊り、第四日目に三坂峠を越えて森松まで歩いた。その頃は国道でも歩くのがあたりまえだった。今から五十七年前のことである。

東の方を眺めると、すぐ近くに黒岳、エビラ山、二ッ岳と一六〇〇米級の山が連なり、逆光線に黒く迫って、岩場も見える。これら



金すき

赤石山脈の東半分は、その昔松山高校旅行部(後に山岳部)の人たちが、縦走を完了するまでに、何回も失敗し、辛酸をなめたところである。

旧制松山高校は大正八年に創立され、旅行部も同時に校友会の一部活動として創設された。今、「山日記」によると、四国には標高一六〇〇米以上の山が五十二座あって大へん多いと思うが、松高創立の頃は、人の登る山といえは石鎚山と剣山位のもので、その他

の山々は知られていなかった。登山路はなく、太古の姿が残されていた。すべてが古きよき時代の山であったわけである。松高旅行部はこれらの山々を次々に開拓していき、大正年代のうちに殆んど総ての山に足跡を残した。旅行(山岳)部長は終始北川淳一郎教授で、限りなく山が好きで、また四国の山ばかり実によく登られた。山に関する著述も多かったが、日本山岳会員ではなかった。

五十年振りに四国の山々を眺めながら、その昔の山登りの労苦を思い故人を偲んで、2時間余り東赤石の頂上で過した。下りは赤石越えから登山路に従って小屋に戻った。夕方になる頃松山商大山岳部の三人が来て小屋に泊った。別子山村に来てから初めて会った登山者であった。今日も自炊。

十四日、一昨日の道を荷を背負って下った。木を切る音もないし、林の静けさを感じる。和田の宿に帰り着いて、五衛門風呂で汗を流し、炭火のこたつにあたりながら、前の川から釣ったての「あまご」の塩焼に舌鼓を打った。主人は川釣りの名人であった。

夜、村役場の福本観光係長、銅山峯ヒュッテの伊藤玉男氏と歓談した。人口が減り続けてきた別子山村も漸く増減なしの状態になって来たそうである。村ではすでに宿泊施設や養魚場その他を経営し

ている。このよい環境をより美しく保ちながら、村が栄えてもらいたいものである。翌朝、宿の夫妻にバス停まで送られて帰京した。

北海道の山

一 原有徳

トムラウシ山

死火山の点に張りつく山椒魚

芽室岳

三ツ積んだ十七年前のケルン

羅臼岳

巖、上へ上へ重なり鯛雲

恵庭岳

雪よりも冷めたき湖の上に佇つ

羊蹄山

朝焼が峰おりて馬鈴薯の一つ一つに

駒ヶ岳

(山麓に住む岳人Y青年の死を悼みて)

亡きあとも凍る夜は岳の鳴る

開こゆ

ベテガリ岳

等高線濃き地図から鷹の羽一つ

カムイエクウチカウシ山

霧深き熊の縄張へ浸入者

ドロミテとスイス

花の旅便り

坂倉登喜子

今年もエーデルワイスを訪ねて
ドロミテからスイスの山麓歩きを
八月十日から十五日間して参りました。
コルチナは石灰岩峰の特異な山に囲まれた賑やかな町で、東

ミヅリナ湖の風物や、最高峰マルモラーダからの大展望は美事でした。世界一長いトンネルで有名なシンプロン峠を越えてスイスに入り、マッターホルン山麓では降雪の中を歩き、フィンドルンアルプではエーデルワイスに三度目の対面をしました。ツェルマツトの山岳博物館は超満員で、歴史資料がぎっしり展示されていました。日本にも完璧な山岳博物館が出来たらと思いましたが、これは山女の夢になりました。今回は四十五名の山男、山女の大移動で成田で関東、関西合流して出発しましたが、レベール・年令差などがあって団体行動に物凄く苦労しました。迷子と事故が無かったことが何よりでした。JAC会報でのご協力、また出発前ドロミテに詳しい牧野夫妻並びに沼倉氏等の皆様からアドバイスいただいたことを、ここに厚くお礼申し上げます。

速報 JQE委員会
チヨモランマ偵察隊出発
九月十五日に斎藤淳生偵察隊長外八名(うち報道三名)は東京を出発、北京に四泊、成都二泊で空路二十一日にラサに到着しました。ラサで二泊して、ルクズヘトラックで入り、二泊して高度馴化を行ない、シガリに泊して二十六日にロンブク僧院(五、一五〇m)に到着という日程です。ルクズから軍用電話の協力で状況を知らせてきました。一行は非常に元気で、中国側の協力に感謝しているとのこと。(渡辺)

東 西南北

『山日記』のすすめ

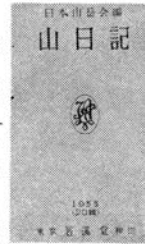
松 丸 秀 夫

『赤い表紙の山日記』とは井上靖、「氷壁」の中に出てくる文句で、主人公はリュックサックの中に『山日記』をしのばせていて、その事で主人公のイメージを浮き彫りにしている。

吹雪の徳沢や、奥又白のテントで『赤い表紙の山日記』を取り出すまじめなアルピニストのイメージが浮ぶ。

松方三郎さんは『山日記』の心からの愛好者だった。

キスリングとは松方さんがスイスから持ち帰ったリュックサックに付けられた呼び名だと思ふのだが、松方さんが山に行く時には、勿論そのキスリングのタッチには『山日記』がいつでも必ず入っていた。



松方さんがお得意だった何十回

の富士登山も、毎年の山日記に記録されているから、「何十何回目」のときは誰と行ったか、すぐ判ると云っておられた。

松方さんの『山日記』は山だけでなく、街でも活用された。常用のノート代りに『山日記』を使っていたから白ページを追加して、挟み込んでおられた。会議が長くなってつまらない話になったら『山日記』をゆっくり読んでいたんだ、と聞かせて頂いた。

常時身近かに活用するものは美しくありたい、とも云われた。

松方さんは殆ど世界中の山と云っている位の代表的な日記を取り寄せて見せて下さった。イギリスの日記は流石に大英帝国の貴録があった。

『山日記』の色ページはこうして採用されたのであり、日記欄の数字の活字体もこの頃苦心して決められた。従って『山日記』は完成度かなり高いと云えると思う。

『山日記』の読物も簡潔で良いと松方さんは云っておられた。一般に評論は長々とイン

トログクシヨンがあるって、それが内容空疎な修辭であることが少なくないが、根

っからの教養人である松方さんは『山日記』のような文がいいと云われた。

村山雅美さんは地上から南極点に達した第何番目かの人であるが、村山さんは『山日記』は山の理科年表であると云う。

理科年表は東京天文台が編集する天文・地質・海洋・気象等のデータ集である。

このような『山日記』は立派な書物だと思ふけれど、時流に乗って沢山売れる種類の本とは考え難い。発行部数を伸ばしたいのは日本山岳会の皆の考えだと思ふけれども、簡単にには行かない。

会員各位に一冊でも多く御利用をお願いしたい。いろんな機会にプレゼントに御利用になるのなど

●二つの委員会からお願い

「この一本展」のお願い

恒例の年次晩餐会の会場に併設し、毎回好評を得ております「この一本展」を今年も企画しております。左記により奮ってご出品下さるようお願い申し上げます。

一、出品物は、山に関する珍本、秘本、稀本、署名本などで、この一本と認められるものなら何でも結構です。

二、出品物には、それぞれ簡単な解説原稿を添付していただきます。(四百字原稿用紙二枚程度)原稿には、書名、著者名、発行所および発行年月日も明示して下さい。

三、展示の方法は、当日出品物を直接会場に持参していただき、開会中、解説原稿とともに展示に供したのち、閉会後、お持ち帰りいただくという方法によって行ないます。

今年もまた上高地山研で逢いましょう！

は如何なものだろうか。

アルピニストの御祝いの機会にとか、記念品にとか、また行動力のある若者の座右に、個性あるペタランの机の上に、『山日記』はきつと価値ある存在だと思う。

四、解説原稿は、前もって図書委員会へお送り下さい。締切は十一月十日です。なおこの原稿は、会報「山」に逐次掲載させていただきます。

今年も充実した内容の一本展にするため、皆様方の積極的なご協力をお願い申し上げます。(図書委員会)

山研だより

山研委員会

ゴールデン・ウィークの開所以来、今年の上高地は天候不順に悩まされました。5、6月は空梅雨、七月の長雨、8月は21日の大雨による土砂崩れで、一週間バスが不通でした。このような悪条件がありました。山研の8月までの利用者は昨年の実績を上まわりました。利用状況は別表のとおりです。

山研開所以来の古くて新しい問題、予約について改めて会員各位

にお願いがあります。

53年・54年利用状況(カッコ内は会員数)

	53年度	54年度
5月	44(25)	98(52)
6月	89(32)	69(39)
7月	144(40)	141(29)
8月	205(42)	212(43)
合計	482(139)	520(163)

ご承知のとおり、山研の利用は予約する事が必要です。悪天候などの緊急避難など、やむをえない場合は別として、利用する方は必ず予約して下さい。夜遅く、利用者が夕食を済ませた時刻に、いきなり来られて夕食を頼む人、夕食の仕度が二重手間になります。予約は当日でも結構です。最寄りの山小屋、バスターミナルからでも利用可能かどうかを確認して下さい。また、キャンセルの場合は、必ず電話を入れて下さい。予約なしで来られる方、無断キャンセルはいずれも管理人に迷惑がかかります。迷惑をかける人は特定の人に限定されているようですが。

山研の電話番号は次の通りです。

◎上高地(026365) 二五三三番(高本)

学生部マラソン大会

毎年恒例の大学対抗マラソン大会を行います。特に今回は、集會委員会の協力を得、OB・OGの多数の参加を望みます。

日時 11月11日(日)

午前11時30分集合

場所 皇居(桜田門前)

種目 団体戦(1チーム4人)

個人戦(現役女子・OG・OBで1人1周)

現役男子・OB・OGで1人4周)

なお、参加賞など豪華賞品

を多数。

問い合わせは 学生部 今野へ

協賛・集會委員会

報告

第24回登山技術講習会報告

恒例の指導委員会(担当理事

嵯峨野 宏)主催の技術講習会

が、谷川岳成蹊大学虹芝寮をベ

スに、5月19日(土)21日(月)

の間に開かれた。

・5月19日 7時 21名の講習

生、11名の講師が集合し、朝食後

4班に分れて行動を開始する。芝

倉沢で雨宮主任講師を中心に、歩

行、滑落停止、ザイルワーク等が

行われ実践に即した内容のある講

習だった。夕刻、加藤講師にエヴ

ェレスト(一九七三年)、マナス

ル(一九七八年)等の思い出話を

していただいた。

・5月20日 班ごとに茂倉岳へ向

かう。全員無事下山の後ミーテ

ィング、コンパ

・5月21日 朝食後解散

・多忙のところ指導していただ

いた雨宮講師をはじめ、多くの優

秀な講師陣、また快く虹芝寮を使

用させて頂いた成蹊大学山岳部

に、厚くお礼申し上げます。

チーフリーダー 川上隆

講師 嵯峨野宏 雨宮節 小原俊

加藤保男 伊丹紹泰 寺本正史

磯野剛太 竹中昇 駒宮博男

成蹊大学山岳部

ドクター 片山隆一

関西支部活動報告

(54年度上期)

4月12日の年次総会に於て、決

算および予算、活動報告および行

事予定が承認され新年度の活動が

始まりました。

・4月22日 月例山行

「北摂山系 深山(七九〇M)」

大阪府の北のはずれにある山で

足の便も悪いのだが、それだけに

静かな山である。天候にも恵まれ

頂上一带の草原で、うらかな春

の一日を過ごす。(参加者 21名)

・5月25日 月例山行

「大台ヶ原 大杉谷 下降」

25日に本部自然保護委が奈良県

庁を訪れ、上北山村の白川又谷林

道工事等について要望書を提出

し、現地を支部委員と共に視察す

る。26日より大杉谷を下る。雨の

多い大台ヶ原にもかかわらず晴天

に恵まれ、あたりは「ツクシシャ

クナゲ」の花が満開であった。

(参加者 本部8名 支部8名

地元2名)

・6月24日 月例山行

「伊賀 大洞山(一〇二一M)

ニヶ岳(九五七M)」

近鉄名張駅から麓までバスで行

くこの辺の山々は、火山性の山で

低い乍らも屹立しており、独特の

風格を持っている。遥かな大峰、

大台山系を眺めつつ縦走をする。

(参加者 9名)

・6月27日 集会

於、スポーツマンクラブ

田村聡明氏を囲んで「大峰の自

然破壊と日本山岳会の自然保護運

動」と題して、先の白川又谷の報

告等を8ミリの交えて、お話を伺

う。(参加者 12名)

・7月22日 野外集会

「汗をかくて生ビールを飲む会」

阪急六甲駅に集合し、六甲山系

摩耶山(六九八M)の東谷を廻り途

中できるだけ水分を補給せずに一

気に神戸三宮駅の屋上ビアガーデ

ンに直行して、ジョッキを空ける

という会。(参加者 20名)

・8月12日 野外集会

於、信州大町 木崎湖畔

小原山荘

毎年恒例の行事で、この期間中

に会員が誘いあって、ここをB・

Hとして活動する。本年も、ビー

クハント、縦走、沢登り、そして

湖畔の散策等、各々好きなコース

をとり、夜は山の話に話はず

んだ。(参加者 16名)

・委員会 5月14・31日、7月4

日に開かれました。(鼎治紀)

会務報告

8月理事会

(8月6日午後6時30分 本会

ルーム)

▽出席者 西堀会長、折井、渡辺

副会長、宮下、中島、中川、鈴

木、中村、山口、高本、川上、

越田、高橋、岡沢各理事 片

岡、小原(患)各監事、田口、金

坂、近藤、小原(患)、望月、織

内、河野、木下各評議員

委任 大森、菅沢、嵯峨野各理

事、太田、高遠各評議員

▽議案

◎チョモランマ峰登山に関する議

定書調印の件

(渡辺副会長、宮下)

7月29日に訪中し、中国側と

協議してチョモランマ峰登山に

関する議定書に調印した。了承

◎チョモランマ委員会並びにJQ

E委員会設置の件(西堀会長)

チョモランマ峰登山を完遂す

るため、本事業の監督責任を担

うチョモランマ委員会と登山の

実行面を担当するJQE委員会

を設置する。両委員会の委員を

次のとおり決定したい。

委員長 西堀栄三郎

委員 折井健一、渡辺兵力、

織内信彦、望月達夫、小原

勝郎、田口二郎、吉阪隆正、

村山雅美、金坂一郎、村木

潤次郎、大塚博美、丹部節

雄、中村純二、飯野亨

JQE委員会

委員長 渡辺兵力

委員 宮下秀樹、浜野吉生

湯浅道男(必要に応じ委員

を増員する) 承認

◎日本山岳会チョモランマ峰偵察

隊員の件 (西堀会長)

同隊員を8月25日までに決定

し、名簿を中国側へ提出する必

要があるので、この件の人選を

一任していただきたい。なお、

偵察隊は9月15日出発予定。 承認

ルーム日誌

(54年8月)

6日(月) 理事会

7日(火) 婦人懇談会

8日(水) 山研委員会

18日(土) ビールパーティー

21日(火) 婦人懇談会

今月の来室者二六〇名

会員移動(8月)

除籍取消

六四三〇 白木正俊

支部変更

七四一五 小泉昌弘(岩手より秋

田へ)

八四二一 内藤秀樹(山形より福

岡へ)

2 研究・記録

- 1 高嶺の雪 落合直文 明治書院 明29・9
- 2 信濃の花 田中貢一 荻原朝陽館 明36・8
- 3 高山植物叢書第2巻 前田曙山 橋南堂 明40・6
- 4 信濃地名考 吉沢好謙 松陽堂 明40・6
- 5 日本高山植物図譜第一巻 牧野富太郎 成美堂 明40・7
- 6 日本高山植物図譜第二巻 牧野富太郎 成美堂 明41・1
- 7 高山植物叢書第3巻 前田曙山 橋南堂 明41・1
- 8 高山植物採集及培養法 志村鳥嶺 成美堂 明42・3
- 9 飛騨山川 岡村利平 住井書店 明44・11
- 10 日本火山 小林房太郎 隆文館 大9・9
- 11 趣味の湖沼学 田中阿歌磨 実業之日本社 大11・7
- 12 富士山植物誌 梅村甚太郎 任地楼 大12・7
- 13 山の科学 原田三夫 新光社 大13・1
- 14 大雪山及石狩川上流探検開発史 河野常吉 大雪山調査会 大15・8
- 15 富士山鳥界一斑 黒田長礼 葦葉房 大15・11
- 16 雲峯富士 教育学術研究会 同文館 昭2・7
- 17 高山研究 河野齡蔵 岩波書店 昭2・10
- 18 日本地形概説第一巻関東奥羽篇 工藤暢須 中興館 昭2・10
- 19 本邦各火山文獻集 原田準平 古今書院 昭3・7
- 20 富士の研究V—富士の地理と地質 石原初太郎 古今書院 昭3・9
- 21 富士の研究I—富士の歴史 井野辺茂雄 古今書院 昭3・11
- 22 富士の研究VI—富士の動物・富士の植物 岸田久吉 古今書院 昭3・11
- 23 富士の研究III—富士の信仰 井野辺茂雄 古今書院 昭3・12
- 24 台湾高山植物図説 伊藤武夫 台湾植物図説 昭4・3
- 25 富士の研究III—富士の文学・富士の美術・富士の遺跡 高柳光寿 沢田章 柴田常恵 古今書院 昭4・3
- 26 雷鳥 矢沢米三郎 岩波書店 昭4・4
- 27 登山術 黒田正夫 大村書店 昭7・6
- 28 六甲 竹中靖一 朋文堂 昭8・3
- 29 鳳凰山 加賀爪鳳南 ハイキング社 昭8・7
- 30 山と民俗 高橋文太郎 山と溪谷社 昭8・7
- 31 日本登山要覧 宮川順輔 春陽堂 昭8・8
- 32 高山植物の培養 河野齡蔵 朋文堂 昭9・7
- 33 日本アルプスの研究 矢沢米三郎 三省堂 昭10・6
- 34 先賢者—アルプス登山者小伝 大島亮吉 梓書房 昭10・7
- 35 下伊那の地誌—遠山地方 信濃教育会下伊那部会 山村書院 昭11・3
- 36 谷川岳 志馬寛 大芸社 昭13・5
- 37 駒ヶ嶽研究第一輯 上伊那郡教育会 信濃毎日新聞社 昭15・9
- 38 雪 田口竜雄 古今書院 昭15・10
- 39 日本アルプスの氷期と氷河 今村学郎 岩波書店 昭15・12
- 40 極地集誌 加納一郎 朋文堂 昭16・10
- 41 地誌目録 内務省地理局 大岡山書店 昭16・11
- 42 浅間山風土記 萩原進 高橋清七 昭17・3
- 43 輪標 高橋文太郎 日本常民文化研 昭17・5
- 44 山村動物誌 松山義雄 山岡書店 昭18・8
- 45 北方の植物 館脇操 アルス文化 昭19・2
- 46 尾瀬ヶ原 尾瀬ヶ原総合学術調査団 日本学術振興会 昭29・2
- 47 後氷期の世界 湊正雄 築地書館 昭29・6
- 48 雪の科学 黒田正夫 同和春秋社 昭31・2
- 49 ヒマラヤ—山と人 深田久弥 中央公論社 昭31・7
- 50 那須の植物 生物学研究所 三省堂 昭37・4
- 51 地図の利用法 西村謙二 朝倉書店 昭49・9
- 1 歌狂富士百景画譜 大川錠吉 大川屋書店 明23・10
- 2 富士山スケッチ 杉浦非水 金尾種次郎 明41・7
- 3 登高行 富田碎花 更生閣 大13・7
- 4 手招く者 富田碎花 同人社 大15・11
- 5 風景を歩む 伊藤秀五郎 東京詩学協会 昭3・9
- 6 日本アルプス大観 冠松次郎 木星社書院 昭6・6
- 7 山 井田清 山と雪の会 昭6・9
- 8 旅と滞在 尾崎喜八 朋文堂 昭8・6
- 9 高山深谷第九編 日本山岳会 梓書房 昭8・8
- 10 山岳詩集 中西悟堂 朋文堂 昭9・2
- 11 高山深谷 日本山岳会 アルス 昭16・12
- 12 此の糧 尾崎喜八 二見書房 昭17・10
- 13 岳神 藤木九三 朋文堂 昭18・12
- 14 秩父山塊 福沢一郎 フトリエ社 昭19・4
- 15 富士詠史 福田栄一 富岳本社 昭21・11
- 16 山は屋上より 足立源一郎 朋文堂 昭31・6
- 17 山の眼玉 畦地梅太郎 朋文堂 昭32・12
- 18 ヒマラヤの高峰別巻写真集 深田久弥 雪華社 昭41・1
- 4 遭難・追悼
- 1 銀嶺に輝く一報告と追悼 樺山正雄 東京帝国大学運動会スキー山岳部 昭5・7
- 2 山彦—上林盛二君を偲びて 林公男 津田十郎 西沢成治 上林盛一 昭5・8
- 3 浅間山遭難記録 古谷善亮 鉄道省浅間山遭難救援会 昭9・5
- 4 雪線の人 稲葉充 山と溪谷社 ハイキング社 昭12・12
- 5 石楠花 藤崎昌美 東京登山歩流会 昭16・5
- 6 風雪のビザーク 竹越利治 杉本光作 昭25・1
- 5 雑誌・部会報
- 1 雲峰霧島山一日向第八・九合輯 日向郷土会 文華堂書店 昭8・1
- 2 東京市山岳部年報—No. 2 上原六郎編 東京市役所体育会 山岳部 昭9・12
- 3 丹沢—昭和十三年— 北村八郎編 秦野山岳会 昭13・2
- 6 案内・技術
- 1 日本アルプス白馬嶽登山案内 高山館編 梅津書店 大8・7
- 2 日本アルプス登山案内 矢沢米三郎 岩波書店 大9・7
- 3 十和田湖 武田千代三郎 十和田保勝会 大11・7
- 4 祖母嶽 百溪録太郎編 大14・10
- 5 大雪山—登山法及登山案内 小泉秀雄 大雪山調査会 大15・7
- 6 神秘の阿寒 柳原直 佐々木書店 大15・8
- 7 飛騨側より北アルプスへ 内山知春 平田書店 昭3・7
- 8 白馬岳 矢沢米三郎 岩波書店 昭5・6
- 9 山野スキー術教本 水野祥太郎 黒百合社 昭6・12
- 10 岩登り術 水野祥太郎 黒百合社 昭8・9
- 11 白馬岳—山とスキーと植物の案内 田辺和雄 古今書院 昭12・6
- 12 岩壁登高 小林隆康 博山房書店 昭17・1
- 7 その他
- 1 函山誌—名箱根土産— 松井鎭三郎編 逕州屋 明27・7
- 2 姥捨山考 佐藤寛 万巻堂 昭28・3
- 3 日光 史蹟名勝天然記念物保存協会 画報社 大4・6
- 4 山窩の生活 鷹野弥三郎 二松堂書店 大13・9
- 5 山の人生 柳田国男 郷土研究社 大15・11
- 6 雪と人生 高橋喜平 朋文堂 昭9・12
- 7 山の神とマコト 柳田国男 寧楽書院 昭11・8
- 8 遠野物語・増補版 柳田国男 郷土研究社 昭12・1
- 9 野草雑記 2冊 柳田国男 鴨書林 昭16・1
- 10 丹沢山の山窩 三角寛 小峰書店 昭16・4
- 11 雪と文化 堀川豊水編 人文閣 昭17・2
- 12 春鳥鳥譚 内田清之助 桜井書店 昭17・5
- 3 芸術・画文集・写真集

図書受入報告

図書委員会

町田立穂氏寄贈図書目録(和書の部)

1. 紀行・随想(つづき)

- 51 マッターホーン北壁を攀ぶ 山上雷鳥 朋文堂 昭8・9
 52 赤石嶽より 前沢淵月 西沢書店 昭8・10
 53 山郷風物誌 長尾宏也 竹村書房 昭9・6
 54 台湾の山 児島勘次 梓書房 昭9・7
 55 千島の山 長谷川清三郎 梓書房 昭9・7
 56 泉を聴く 西岡一雄 朋文堂 昭9・9
 57 霧の旅—紀行・随筆 松井幹雄 朋文堂 昭9・10
 58 わが山山 深田久弥 改造社 昭9・12
 59 奥多摩 田島勝太郎 山と溪谷社 昭10・5
 60 北の山 伊藤秀五郎 梓書房 昭10・5
 61 奥秩父—続篇 原全教 朋文堂 昭10・7
 62 山の隣人 長尾宏也 竹村書房 昭10・10
 63 雪艇弥栄 立上秀二 岡倉書房 昭11・2
 64 山麓通信 高畑棟材 昭森社 昭11・6
 65 山頂漫步 関口泰 書物展望社 昭11・10
 66 上越の山 日本登高会 三省堂 昭12・6
 67 台湾の山と蛮人 田中薫 古今書院 昭12・6
 68 雪庇 随想集 帝国大学新聞社編 帝国大学新聞社 昭12・11
 69 伊那谷木曾谷 細井吉造 故細井吉造遺稿集刊行会 昭12・12

- 70 峰・溪々 冠松次郎 書物展望社 昭13・7
 71 山・原野・牧場 坂本直行 竹村書房 昭13・9
 72 峯・嶺・ビンカ 冠松次郎 三省堂 昭14・10
 73 山の幸 深田久弥 青木書店 昭15・12
 74 登臨行(上巻下巻2冊) 足立源一郎 昭15
 75 廊下と窓 冠松次郎 三省堂 昭15・12
 76 山旅の素描 茨木猪之吉 三省堂 昭15・12
 77 偃松帯 織内信彦 朋文堂 昭16・8
 78 わが山わが溪 冠松次郎 墨水書房 昭17・1
 79 山の言葉 森本次男 朋文堂 昭17・10
 80 北の山・南の山研究・随想・紀行 三省堂 昭17・11
 81 尾瀬と桧枝岐 川崎隆章 那珂書店 昭18・2
 82 山への味到 冠松次郎 墨水書房 昭18・4
 83 新緑登高 関口泰 那珂書店 昭18・10
 84 山茶花 田部重治 七文書院 昭18・10
 85 氷河の山旅 田中薫 朋文堂 昭18・11
 86 山岳渴仰 中村清太郎 生活社 昭19・10
 87 高原暦日 尾崎喜八 あしかび書房 昭23・3
 88 ベテガリ岳遠征記 小島六郎 サン書房 昭23・7
 89 屏風岩登攀記 石岡繁雄 碩覚書房 昭24・9
 90 をちこちの山 深田久弥 山と溪谷社 昭27・5
 91 山なみはるかに 三田幸夫 白水社 昭29・7
 92 ヒマラヤを語る 今西錦司 白水社 昭29・12
 93 ヒマラヤの旅 竹節作太 ベースボールマガジン社 昭32・6

●お知らせ

事務局

新しいデザインのルーフタイ(色は赤と紺)を事務室で販売しております。単価 二千円(郵送を希望の場合は百円を添えてお申込み下さい)。
 ●語句の正誤 会報四〇九号3頁上段19行目、酒田は酒戸。四一〇号3頁下段23行目、神山は袖山の誤りです。訂正してお詫びいたします。

昭和五十四年十月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五—四

サンビニウハイツ四番町

発行所 法入 日本山岳会

発行者 西堀栄三郎

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(03)四四三三

振替口座東京三三三九二九番

東京都港区赤坂一丁目三番六号

印刷所

株式会社 技報堂